

日本GAP協会の会報誌「MONTHLY-J」が「JGAP+」にリニューアルいたしました。
JGAPがきっかけとなり、新しい人と人の出会い、新しい農産物の流通、
新しい農業ビジネスモデルの構築が各地で始まっています。
「JGAP、そしてその先へ」をテーマに、最前線をお伝えしていきます。

JGAPとは……

JGAPは、食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられる認証です。JGAPは、農場やJA等の生産者団体が活用する農場・団体管理の基準であり、認証制度です。農林水産省が導入を推奨する農業生産工程管理手法の1つです。

J G A P T O P I C S

JGAPトピックス

農薬・肥料・資材部会 第2回会合が開催

2月21日、農薬・肥料・資材部会第2回会合が科学博物館(東京都千代田区)で開催された。「農薬メーカーによるJGAP普及推進の意義とIPMの在り方」と題した今回の会合では、2つの講演が行なわれた。「農薬業界で働く者としてGAPに期待すること」と題した講演では、巻淵進氏(バイエル クロップサイエンス株)が登壇し、農薬メーカーが社会的責務を果たすためにもJGAP普及推進をしていきたいと述べた。広本直樹氏(全国農業協同組合連合会)は「IPMにおける物理的防除資材」と題した講演で各種資材の特徴と導入事例の紹介を行なった。会員企業や認証農場が企業の枠を超えて農場視点でIPMの実践に取り組み、環境保全型農業実現の方法を確立するプロジェクト「IPM実践道場」の内容についても発表がされた。



文部科学省 高校の学習指導要領・農業に「GAP」が登場!

平成25年度から農業高校の授業の中でGAPについて学ぶことになった。これは文部科学省が定めた新学習指導要領(平成22年度に改訂)が実施されたことによるもの。「高等学校学習指導要領解説 農業編」では「食品等については、生産・加工・流通・消費のどの段階においても安全で安心できることが求められている観点から、農業生産工程管理(GAP)手法を「実践的な知識と技術を身に付けられるようにした」という記載がある。

総務省「情報流通連携基盤の生鮮農産物 トレーサビリティ情報における実証に係る請負」事業を支援

日本GAP協会は、日本GAP協会会員である(株)野村総合研究所が総務省より受託した「情報流通連携基盤の生鮮農産物トレーサビリティ情報における実証に係る請負」事業を支援した。本実証事業では、生鮮農産物の分野で使用できる「情報連携基盤システム」を構築し、農場に蓄積されている生鮮農産物の栽培情報、品質情報、流通情報、消費者の評価情報等を収集し、それらを農場、流通業者、消費者等へ提供することで、情報を利活用する実証を行った。また、農産物以外の他分野とのデータ連携やシステムの備えるべき要件について検証を行った。

今月の新規会員ご紹介

百農社国際有限公司

(東京都千代田区・寿司やおむすびをはじめとした日本食惣菜店のチェーン展開)

株式会社富士通エフサス <http://jp.fujitsu.com/group/fsas/>

(神奈川県川崎市・情報システムの企画・設計、構築、設置・工事サービス等)

JGAPキーパーソン・インタビュー

芝田清邦

Kiyokuni Shibata

(株) 匠壽庵 代表取締役会長

和菓子メーカーだからこそ
見えるJGAPの可能性

滋賀県大津市の和菓子メーカー、叶 匠壽庵。同社は「農工一体の菓子づくり」を目指し自社グループ内にウメやユズなどを生産する農業部門をつかさどる芝田果徑を設立、川上から川下に至るまで「心を込めたお菓子づくり」を行っている。

2013年2月にJGAP審査認証を受けたばかりであるが、実は1年前から認証取得を目指し、研修を重ねてきたという。

では、JGAP認証に注目し、どのように活用しようとしているのか、芝田清邦氏および村田博氏に話を聞いた。

しばた・きよくに

1946年滋賀県大津市生まれ。同志社大学卒業後、父・芝田清次氏が創業した(株) 匠壽庵に入社。82年社長に就任後、滋賀県大津市大石龍門に「寿長生の郷(すないのさと)」を造営。「農工一体の菓子づくり」を実現するべく、敷地内に和菓子工場、ウメ、ユズを生産する農園がある。2012年代表取締役会長就任。写真左は村田博・農業生産法人(株)芝田果徑 代表取締役社長。http://www.kanou.com/



村田博

芝田清邦

叶 匠壽庵を代表する銘菓・標野(しめの)はウメが原料



原材料供給の役割を超える可能性も

——そもそもJGAPに関心を持つようになったきっかけは？

当社のある場所は「寿長生の郷(すないのさと)」と申しまして、6万3000坪の広大な土地に社屋、和菓子工場、お食事処、そして和菓子の原材料となるウメやユズを生産している農園もあります。農園は農業生産法人である芝田果徑の担当です。当社がJGAP認証を取得しようとなったのは、購読している雑誌『農業経営者』に服部一成氏(日本GAP協会常務理事)の記事があったのがきっかけで、彼とご縁ができたんです。服部氏からJGAPの目指しているものや手法といったことを教えられ、「これからの時代には必要な」と思い、芝田果徑がJGAP認証を取得しました。今、叶 匠壽庵には1名の、芝田果徑には3名のJGAP指導員がおります。

——JGAP認証を取得したことで、グループ内に変化のようなものは生まれましたか？

これまで30年近く、ウメとユズの生産はやってきて、それが漫然とやってきたというわけではないけれども、やっぱりJGAPに取り組んだことで、社員は主体的に考え、取り組めるようになってきたと感じますね。まだまだ意識を高めていかなければいけないとは思っていますけれども、また生産工程において解決しなければいけない課題が何であるかが明確になってきたのもメリットでしょう。それと、JGAP認証を取得したことで、経営がまた新しい方向へ進んでいくのではないかと実感もあります。今のところは、芝田果徑は叶 匠壽庵の作る和菓子の原材料を供給する役割を担っているにすぎません。しかし、JGAP認証を取ったことによって、芝田果徑は叶 匠壽庵以外のみなさんにもお役に立てる存在になれるはず。今まで作ったことがない野菜を作ってみる、それを自社店舗に並べるだけでなくスーパーやコンビニに卸すといったことができるでしょう。契約栽培

をして地域の農業を盛り上げていくにはJGAPをツールとして活用していく必要があるでしょうから、芝田果徑の社員に頑張ってもらうなければいけません。新しい目標が見えてきたからでしょうね、グループの中でも芝田果徑の社員がえらく元気になりましたわ(笑)。

農の国・日本ならではの理念を持つものに

——寿長生の郷には年間6~8万人ものお客様が訪れるとか。大勢の方に叶 匠壽庵がJGAPに取り組んでいることをアピールできる価値は大きいのではないのでしょうか？

おっしゃる通りかもしれませんね。少し話はずれてしまうかもしれませんが、今TPP(環太平洋パートナーシップ協定)参加云々で騒がれていますよね。参加することになれば、いろんな農産物が海外から入ってくることになるでしょう。だけど、そのことによって結果的に日本の食、農産物の質の良さ、あるいは農家の志の高さが見直されるんじゃないかと思うんです。そうなった時、JGAPというやり方で、安全・安心を意識して農業をやっている叶 匠壽庵と芝田果徑はすごいと認識されるのではないのでしょうか。特にJGAPにも謳っている環境への配慮という部分において、評価されると思っています。

——JGAPおよび日本GAP協会に望むことはありますか？

単にシステムや、テクニクといったようなことではなく、それらを超越した、言うなれば関わる人々すべてに役に立つ、豊かにする、生きるしるべにもなるという理念あるいは哲学が根底にあってほしいと思っています。そういう理念がないと、単にお金だけの話になるし、それは日本の文化を無視したようなものになってしまうわけですから。願わくは、世界に誇るべき「和」の文化・精神のように、日本で生まれたJGAPとその理念が世界に通用するような崇高なものになっていくことを期待しています。

事務局長
編集後記

JGAP認証を取る植物工場が続々と出てきています。植物工場とは言えども、太陽光利用型から人工光閉鎖型まで多様です。植物工場は農薬を使わず一般生菌が少ないために安全性が高いとマーケティングしている方もおられますが、実態を見ると一概には言えません。このようなことが言いたい場合、ハードはもとより、使用する水や働く人の管理など、つまりソフトもセットで作りこむ必要があります。

日本のように光も水も積算温度も十分な場所では、植物工場は従来型の施設栽培と競合し、コスト面を考えると広く普及するには難しい面があります。そのため私は、植物工場に取り組む方々にロシアなど極寒の海外産地での生産をお勧めしています。冬の間、新鮮な野菜が国内で生産しにくい地域こそ、植物工場は威力を発揮すると私は思っています。